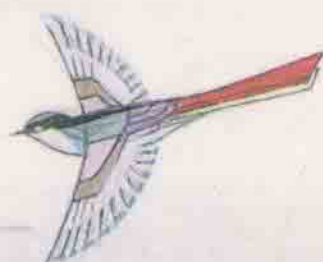


谷崎潤一郎

らん

ぎく

蘭
菊
牛
言





中公文庫

乱菊物語

1995年 6月3日印刷

1995年 6月18日発行

著 者 谷崎潤一郎

発行者 嶋中行雄

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋2-8-7 振替 00120-4-34 TEL 03-3563-1431(販売部)

©1995 CHUOKORON-SHA, INC. / Emiko Kanze

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 本州製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202335-1

Printed in Japan

中公文庫

乱 菊 物 語

谷崎潤一郎

中央公論社

目次

発端 はつたん

二人侍 にんざむらい

海島記

燕 つばくろ

小五月 こさつき

室君 むろきみ

むしの垂れ衣 たきぬ

夢前川 ゆめさきがわ

大らかなロマネスクの魅惑

佐伯彰一

395 331 299 249 201 121 74 28 7

乱菊物語

発端

その一

室町幕府の末、瀬戸内海の島々は海賊どもの策源地となっていて、因島、児島、来島、沖島、大島、塩飽島、能美島等には、それ／＼一方の首領株が多く、輩下を従えて巢窟を作り、通行の船舶を掠奪したので、殊にそのころ貿易のために明国福建省寧波府と泉州堺の浦との間を往復する彼我の商船のうちには、彼等の襲うところとなつて船員も財物も共に失われてしまったことが珍しくなかつた。海賊どもは内海を荒し廻つたばかりでなく、朝鮮、満洲、直隸省の沿岸から、遠くは南洋方面にまで倭寇の害を逞しゅうし、南支那の地方にも彼等と連絡を取っている者があつたから、たま／＼目ぼしい貨物を積んで彼の地の港を発航した船などがあれば、彼等は予めその情報を手に入れて用意を整え、それが自分たちの根拠地へ近づいて来るのを待ち構えている便宜を持っていた。

そういう中でも、時は義植^{よしたね}將軍の永正年中、大明国^{だいみんこく}の年号によれば武宗皇帝の正徳年中の春のころ、日本へ渡航すべく寧波府を出帆した明の貿易商張惠卿^{ちやうけいきやう}の商船ほど当時の海賊共に手ぐすねを引かしたものはなかった。それはいうまでもなく、世に珍しい一箇の宝をその船中に蔵していることが早くも彼等に嗅ぎ付けられたゝめであつて、そのころの普通の貨物といへば、日本から輸出するものは、金、銅、硫黄、蒔絵細工、刀、鎗、扇子、瑪瑙^{めのう}等であり、支那から輸入されるものは唐糸、錦、藥劑、書籍等であつたが、張惠卿がそのために附け狙われた宝というのは、勿論そんなものではなかった。貿易船のことであるから今挙げたようないろ／＼の輸入品をも積んでいたことはいたろうけれども、張がわざ／＼大いなる危険を冒してまでも赤間ヶ関を乗り切つて内海へ船を入れようと志したのは、嵩^{かさ}からいへば両の掌^ての中へ隠れてしまふほどに小さい、四角な黄金の函のためだったのである。

張はその函を何処へ運ぼうとしたのか。彼はその函の中に収めてある貴い物を、堺の津へ来て日本の商人に売り払う積りであつたか、それとも交易の料にしようというのだったか。もし錢に替えようとするのなら、その品物は恐らく数百両、数千両の値いと呼ぶことが出来たであらう。また財物に易^かえようと思ふなら、今もいうように二つの手の中へ這入つてしまふ小さい物体をもつてして、彼の乗つて来た巨船の舷^{ふなばた}に溢れるほどの荷を盛ることも容易であつたらう。彼といへども利に敏^{さと}い商人である以上、そのくらの

道理が分らなかつたはずはない。しかしながら張惠卿の目ざしていた港は堺の浦ではなくて、実は播州の室の津であつた。室の泊りの或る一人の遊君の笑みを買わんがために、彼ははる／＼海を渡つてその函を持つて来たのであつた。

こゝで、先ずその宝物の性質が何であるかを明かにして置く必要がある。小さな函に入れてあるといったら、気の早い読者は定めし宝石の類で／＼もあるように想像されたことであろう、が、それは精巧な織り物で出来た、十六畳の広間へ吊れるうすい羅綾の蚊帳なのである。しかもそれほど広さを持ちながら、小さく幾つにも畳むときは、二寸二分四方の容れ物の中へ綺麗に収まつてしまふという、そんなにもうすい蚊帳なのである。

この蚊帳の由来と、張惠卿がこんなものを室君の許へ届けるようになった因縁については、次に記すようないきさつがある。――

そも／＼室という所は、ずっと昔、遠くは神武天皇の東征、神功皇后の三韓征伐の時代から内海における良港の一つに数えられていたから、上り下りの船の人々の相手となつて旅情を慰める女、――「室の遊女」というものも久しい以前からあつたに違いない。伝説によると、延喜の御代にいづこともなく天女のような一人の美女が流れて来て、名を「花漆」と呼んで、この津に住んでいた。それが初代の室君であつて、本邦における遊女の濫觴をなしたといわれる。そうしてこの物語のころには、世は応仁文明の戦

乱の余波を揚げて、近畿は素より、中国、四国、九州の国々までも大小名の間に権力の争奪が絶える折なく、日本国中一箇所として静謐な土地はなかったにも拘らず、室の泊りは古えから加茂神社の社領として代々の太守から特別の保護を受けており、免税地となっていた上に、世間が物騒になればなるほど、兵士や物資の運搬のために港は一層賑わったから、この津ばかりはいつの時代にも繁昌をつづけて、遊君の館も花漆の昔に変わらぬ榮華を誇っていたのである。

しかし読者は、中古の遊女と近世のそれとを同一に考えてはならない。最初の室君花漆は「室君」という敬称が示す通り、ほんとうに室の「君」であり、土地の「長者の娘」であつて、その家に客となることが出来る者は、公卿とか武將とかいった類の、上流の貴人に限られていた。たとえば最初の室君によって建立された五箇の精舎の跡というのが今でも残っていることを思えば、それだけの富と力を備えていた花漆は、名実共にあの美しい海港の女主人公であつたであらう。そればかりでなく、西行法師の撰集抄や土地に伝わっている口碑によれば、彼女は実に普賢菩薩の化身であると信じられていた。その事の起りは、やがてこの物語にも或る関係を持つようになるから、こゝにあらましを記してみると、昔、播磨の国書写山の開祖性空上人は何とかして生身の菩薩の姿を拝みたいと願っていたが、或る夜「こゝより西南に室という津がある、その地の長者花漆と呼ぶ白拍子こそ普賢菩薩の化身である」という霊夢を授かつて、彼女に逢い

に來たところ、花漆は上人を請じて酒をすゝめ、

周防すほうのみたらしの沢辺に、風のおとづれて、さゝら波たつや

と唄いながら舞った。上人がじつと眼を閉じてそれに耳を傾けると、歌の文句が、

法性ほつしやうむろ無漏むろの大海には、普賢ふげん恒順こうじゆんの月、光ほがらかなり

という風に聞え、眼瞼まぶたの裏に白象に乗った普賢菩薩の像が浮かんた。不思議に思つて眼を開いて見ると、矢張、白拍子が舞っている。眼を閉じると再び普賢の像が浮かぶ。そこで上人は随喜の涙を催して花漆を礼拝らいはいしたが、彼女は忽ち白象に駕がして西方さいほうの空へ飛び去ってしまった。後世室君の館の所を尾野町おののと呼んでいるのは、正しくは「尾の町」の意であつて、その時上人が名残りを惜んで白象の尾を捕えたものだから、尾だけが切れて落ちた跡だというのである。

この花漆の後にも、平家の落人おちうととして流転るてんの女の群に投じ、建永年中ほうねん法然上人の教化きやうげを受けて尼になつたという友君、その外宮木、大柄杓えしやく、小柄杓などという名高い遊女があるけれども、それらの事蹟を委しく述べるまでもあるまい。かくて足利將軍の治世に下つて、恰あたかもこの話の始まるころ、尾野町の遊君の館には又もや古えの花漆に劣らない一人の美女がいたのであつた。

その女は名をかげろうといつたが、当時彼女の噂は、新しい港の女王、——昔の室君の再来として、戦評定いくさひやうじやうに忙しい都の武士の間にも聞え、遠く海の彼方にまでも響いて

いたことは、明の商人の貢の船が八重の汐路を押し分けて来たことでも知れよう。が、張惠卿はたゞかげろうの評判ばかりを耳にして、見ぬ恋にあこがれて来たのではない。或る年、というのは、今から二年前、彼は始めて堺の浦へ商いに来て、帰りの船を室の泊りへ寄せた時に、図らずも此の遊君の客となつて、一夕のもてなしを受けたことがあつた。張はその折、噂に高いかげろう御前の声を聞くことは出来たけれども、姿を見るにはなみ／＼でない思いをした。なぜなら女主人の席と、此の外国の客の席との間には一枚の御簾が垂れていて、その御簾の裾から盃の取り遣りがされたからである。張はどうかして主人を眼のあたり見たいと云つた。しかし左右に侍っている腰元たちは、そんな無礼を許すはずがなかった。平安朝の時代に比べれば、世は末になり、階級の掟が大分自由になつていたとはいふものゝ、まだそのころでも古い習わしが残っていたから、土地の長者ともいわれる女が、名もない者にどうして手軽く顔を見せよう。かげろうの名を聞き伝えて館を訪れる人々の多くは、帳を隔てゝその衣ずれのけはいを察し、ほのかに匂う香の薫りを嗅ぐことが出来たら、身にあまる光榮と思わなければならなかつた。そうして事実、財力ある百姓や町人どもは、たゞそれだけの光榮を購うために何百貫という引出物をすることを吝しまなかつた。

腰元たちは張にその訳を話した。普通の客は女主人の見えざる影と言葉を交わし、その唇に触れた盃から酒を飲んだら、大概満足して帰るのである。それが庶民の分際の者に

与えられる限度である。張はそれだけのもてなしを受けたばかりでなく、遠い国から訪ねて来た珍しい客人まろうどであるところから、女主人も特別に心を尽して、酒の肴に手ずから琴を弾いたりして歌をうたつて聞かせたではないか。そんな手厚い待遇というものは、余程の好意の現われであるから、それ以上の望みは捨てゝもらいたい。——が、そういわれると、猶更張の好奇心は募った。帰りの船に積まれていたところの蒔絵や、瑪瑙や、扇子や、刀や、こがねや、あかがねや、彼の商品の幾種類かゞ二度にも三度にも運び込まれて、次第に堆うずたかくかげろ、御前の御簾の前に盛られて行つた。そうしてそのたびに少しずつ床に垂れていた御簾の裾が巻き上げられた。

彼はそういう風にして、よう／＼の思いで彼女の顔を見ることが出来たが、一つの願いが果たされると、又次の願いを果たしたくなつた。もしこの美しい館の主人が一と夜の情なさけを自分に許してくれるなら、今眼の前に積み上げられた財宝を、もう一度同じ高さにまで積み上げて見せようと、しまいに彼は素晴らしい出した。

かげろ、はこの突飛とつひな申し出でを始めは笑つて聞いていたが、客が再三押し返して頼むと、無下むげに断りことわはしなかつた代りに、一つのむずかしい条件をだした。彼女がいうのは、「昔の室君花うるしも嘗て唐土もうこしの旅人と契りを結んだ例ためしがある。その時その唐人は御礼のしるしに、四寸四分四方の函の中へ収まる八畳吊りの蚊帳を贈つた。花漆が五箇の精舎を建てたのは、その奇蹟的な織り物を朝廷へ献上した時、褒美として黄金千両を

賜わったので、それを費用に充てたのだといわれる。ついでには私も花漆どのに負けないような宝が欲しい。もしもあなたが、広い大明国を捜して、二寸二分四方の函の中へ収まる十六畳吊りの蚊帳を求めて来て下すったら、私もあなたの望みをかなえて上げましょう」というのであった。

その二

明の商人張恵卿は、その時にかげろくに約束をした稀代の土産物みやげものを携えて、ちょうどまる二年ぶりに、今や再び船を室の津へ進めていた。

だが、大明の国土がどんなに広く、どんなに豊かであろうとも、そういう不思議な織り物を如何にして手に入れることが出来たか。何処かの名門の家からでも由緒ある家宝を乞い得て来たのか、骨董屋こどうやの蔵から捜し出したのか、それとも天女の羽衣はごろもを仙人から授かったのか。―― 事實は二年の日子にっしの間に天才的な職人を雇って新しく織らせたものであろうが、当時噂は噂を生んで、かげろふ御前の評判が高まるにつれ、その贈り物の正体についても神秘的な作り話がまことしやかにいい囃はやされた。

船は女王への来貢のついでに堺の浦で交易すべき夥おびただしい商品を積み込んでいたけれども、内海に巢喰う海賊どもの隼はやぶさのような眼は、前にもいったように、たゞ一様に二寸二分四方の黄金の小函に向って光った。

彼等がそれを狙ったのは内々二重の意味があった。それを自分の物にすることは、取りも直さずかげろ、御前を自分の物にすることになる。——誰がいい出したともなく、海賊どもは皆その腹でいた。室君の待っているものは、人ではなくて宝である、誰であろうともその宝を持って来た者に、彼女は約束を果たすのであると、かげろ、自身がその人の前で語ったという取り沙汰もあった。もっと極端な想像をする者は、実はかげろ、は誰かゞそれを盗んでくれることを望んでいるのだ、なぜかといえば、外国人に身を任すよりはたとい鬼のような海賊でも、むしろ日本人にこそ喜んで肌を許そう、彼女はもと／＼出来ない相談をするつもりで難題をいかけたのだ。そんな物をその明国人に今更持つて来られては迷惑なのだ、だから兎に角張恵卿の乗っている船を、千尋ちひろの底へ沈めて欲しい、そうして盗もうとする人も、盗まれまいとする人も、盗まれるべき品物も、みんな一緒に海の藻屑と消えてくれたら尚有難い。それが室君の真意なのだといつたりした。

しかし張恵卿の方でも用心深く船を進めた。いくら乱世だからといって、海賊があれば彼等に備える警戒の道もないことはない。それだけ網を張られている中を首尾よく通過しようとするには、又此方にも手段がある。その頃日本の海権を將軍家から託されて内外の貿易船に勘合かんごうの符ふをだしていたのは、周防の太守大内氏であつたから、彼は一方その大内氏に渡りをつけて、要所々々に警備の船を配置して貰うと同時に目ぼしい海賊の